



「エーミルはいたずらっ子」

1992年、スウェーデンのテレビ番組で、「あなたの物語の主人公で、一番誰が好きですか？」という質問をされたリンドグレンは、「一人だけあげるののは難しいけれど、あえてあげるとすれば、それはエーミルです」と答えました。

『エーミルはいたずらっ子』は1963年、リンドグレンが出版社の編集長として活躍する一方で、作家としても精力的に活動していた時期に執筆され、その後1966年、1970年に続編が書かれました。

エーミルの物語でリンドグレンが描いたのは、生まれ故郷であるスモーランド地方の旧き良き田園風景でしたが、それは自分自身の子どもの時代ではなく、敬愛する両親の生きた時代のものでした。リンドグレンの父親サムエル・アウグストは楽しく、子ども好きで、話し上手な人だったので、いつも子どもたちに自分の子どもの頃のいたずらや、楽しかった出来事などを繰り返して話して聞かせていました。リンドグレンはもちまへの記憶力でそのエピソードを鮮明に胸に刻んでいたでしょう、エーミルの繰り広げる遊びや

いたずら、農場での出来事、スモーランドに住む人たちの気質などを、生き生きと物語の中に再現しています。

スープの鉢を頭にかぶって抜けなくなった、妹を旗立台にぶらさげてしまったリ：エーミルのいたずらはいつも周りのみんなを驚かせ、呆れさせます。いたずらの多くは、実は悪気のないもので、逆に人のためを思っていることが、結果思わぬ事件になってしまふというのがいつものパターンなのですが、巻き込まれた大人たちは黙っています。見かねた村人たちが寄付金を集め、このとんでもない腕白小僧をアメリカにやってしまおうとする。移住が盛んだった時代を思わせる、そんな場面さえあります。しかし、村の人たちやお手伝いさんたちがどんなにエーミルを悪く言っても、エーミルのお母さんは「エーミルは、かわいい子です。わたしたちは、あのまんまのエーミルが好きなんです」と一蹴します。あなたはそのままでもいい：子どもたちにとってそう言われて育つことほど、幸福なことはありません。このお母さんのモデルは、リンドグレンの

愛してやまなかった、いつも彼女を信じて受け入れてくれた母、ハンナだったと言われています。

「エーミルの最後の物語を書いてペンを置いた時には、涙がポロポロこぼれました。もうこれでエーミルに会えなくなるということが分かったからです」と、リンドグレンはインタヴューに答えて語っています。愛する両親の思い出、大好きなスモーランドの美しい自然、子ども時代の記憶：リンドグレンの思いが溢れんばかりに詰め込まれているエーミルの物語は、世界各国で翻訳され、映画化され、たくさんの挿入歌が生まれました。そして今でもなお、『長くつ下のピッピ』や『やかまし村の子どもたち』、その他多くのリンドグレン作品と同様に、世界中の子どもたちの心の中で、色褪せることなく生き続けています。

※アストリッド・リンドグレン作
石井登志子訳
『エーミルはいたずらっ子』（岩波書店刊）

監修 齋藤惇夫

作家・児童文学者。福音館書店の専務取締役（編集責任者）として子どもの本の編集に携わり、2000年に退社、創作活動に専念。著書に『グリックの冒険』（岩波書店・日本児童文学者協会新人賞受賞）、『冒険者たち』（岩波書店・国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『ガンバとカワウソの冒険』（岩波書店・野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『哲夫の春休み』（岩波書店）などがある。

PRESENT

リンドグレンの本をプレゼントします。詳しくはP.26をご覧ください。

ASTRID LINDGREN

アストリッド・リンドグレン

1907-2002



スウェーデンのスモーランド地方、ヴィンメルビーに生まれ、小さな農場で4人兄弟の長女として子ども時代を過ごす。『長くつ下のピッピ』『やかまし村の子どもたち』『名探偵カッレくん』など、世界中で愛されている物語は130作品以上。2002年には、児童青少年文学賞である「アストリッド・リンドグレン記念文学賞」が創設された。